

Ⅱ－1 石川県能登・中学生の作文に描かれた真宗寺院

森岡 清美

1 はしがき

1952、53年の両年、九学会連合によって能登調査が実施された（九学会連合能登調査委員会1955）。私は池上廣正氏を班長とする宗教班に属して、1952年には奥能登の兼業農家を主とする鳳至郡町野町で、1953年には口能登の米作中心の鹿島郡越路町で、真宗寺院調査を実施した。更に1953年、それぞれの町の中学校で担任教員の協力をえて生徒（越路は3年生、町野は2年生）に何れも「お寺」という題目で作文を綴ってもらった。この題目で思い浮かぶものなら、何でもよいから、なるべく詳しく書いてほしいと依頼したが、私自身が生徒に趣旨説明を行ったわけではないので、実際にはどのような指導が行われたのかは、把握していない。なお、「お寺」の所属宗派はとくに限定しなかったが、もし真宗寺院でないことが明らか場合は、本稿の分析資料に含めなかった。

作文は個人的文書 personal documents の一形態として、米国では1940年代初頭から、日本では1940年代後半から注目されたが、当時すでに、作文は日誌・書簡・自叙伝とは異なる表出的記録の一種とみなされている（森岡 1954:21）。日誌等はおおむね事実の記録と考えられるのにたいして、作文には事実の記録に加えて、物語化、事実をふまえながらも筆者の思いを託した創作が加わるからであろう。したがって、事実を追跡する研究で作文を資料として用いるには格別の工夫が必要となる。このためか、実際に作文を主な資料とした研究に接しない。今回の作業は、使用されたことのない調査資料＝技法を用いようとする、頗る大胆な試みといえるかもしれない。

考察情報を真宗寺院に限ったのは、第一に、地域には諸宗派寺院が混在している場合、一口に寺院といっても宗派により寺院活動にもまた寺檀関係にも異なる相があるのに、これを一括して扱ったのでは傾向性が探り出しにくくなると考えられたからである。第二に、対象地域に存在する寺院のなかで真宗寺院が圧倒的に多いからである。越路町では町内7カ寺のうち真宗寺院は5カ寺を占める。町野町では町内14カ寺のうち真宗5カ寺、真言宗7カ寺、曹洞宗2カ寺と、真言宗寺院が最多の半数を占めるが、檀徒数では真宗 770 戸、真言宗413戸と、真宗が断然多数を占める（森岡 1955:214-215）。真宗のなかでは、越路町では5カ寺のうち本願寺派1カ寺と大谷派4カ寺、町野町5カ寺はみな大谷派である。本願寺派寺院と大谷派寺院の寺院活動や寺檀関係は酷似しているので、真宗寺院としてまとめて観察することとした。

資料処理の技法としては、かつて太平洋戦争末期の若い戦死者の遺書を考察したときに用いた「重ね焼き法」（森岡 1991:22, 森岡 1995:4）を用いる。この技法を用いるとき、対象の堅牢なイメージを得るためには、対象の属性をなるべく統制することが必要である。今回、寺を真宗寺院に限り、作文の制作者を能登の二つの町の中学生に限ったのは、このゆえである。ただ、中学生を同一学年に限定できなかったのは、中学校側の都合によるもので、やむをえなかった。資料として使いうる作文の数が、奥能登の中学2年生39点にたいし口能登の中学3年生は80点と倍もあって、情報量に大差があるうえに、全く同一のテーマにもかかわらず、奥能登の支配的なスタ

イルは現状報告であるのにたいし口能登のそれは現状批判であるという、内容の差異が大きかったので、資料を生かすために、設定した分析の切り口が異なることとなった。また、なるべく多数の資料を確保することが、堅牢なイメージの構築のために必要ということは承知しながら、一学年の全員を対象とすること以上の打開策がなかったことも、申し添えておかねばならない。

叙述は、奥能登の中学生の作文から始め、ついで口能登の中学生の作文に移る。両地域とも、まず作文の内容をまとめ、つぎに、別途面接調査で探った寺院の存在形態・寺檀関係に関する情報でこれを点検補説する。上記の理由で両者の切り口、節立ては同一でないが、大局的比較により、地域差と事態の背後に潜む大きな動向を探り出すことは可能ではないかと考えている。そして最後に、資料＝技法としての作文の強みと弱みに言及する。

2 奥能登・町野町中学生の作文に描かれた真宗寺院の態様

奥能登では、前述のように輪島市の東端町野町で、とくに川西を選んで集中調査を実施し、川西に門徒をもつ南隣の金蔵正願寺と同慶願寺、および町野川を渡った東の鈴屋長光寺を調査した。現地調査は1952年7月29日～8月8日、同年11月25日～29日、ついで翌53年の11月28日～30日に実施し、その後も何度か正願寺を訪ねて調査を反復した。作文は1953年11月、同年8月口能登の越路町でえた作文と同じ要領で、「お寺」と題する作文を町野町中学生に書いてもらった。中学生の学年を越路町にそろえる予定であったが、町野中学校側の都合で3年生から2年生への変更を余儀なくされ、地域差に年齢差が加わったが、残る共通性を頼りに、なんとか意味ある比較にしたいと考えるものである。

作文記者は2年生全員（2学級）である。私が受け取った作文の総数は77、うち生徒の家の宗派が真言宗・禅宗であるもの26、および疎開寄留者を含めて宗派不詳なるもの5を除いた残りの46が、真宗の家の子どもたちのものである。そのうち、町内西時国の名刺・真言宗岩倉寺の開帳参詣についてのみ書いたもの5、および文意不明あるいは解読困難2を除いた39が資料となる。39点の作文記者の分布は全町14集落にわたる。以上のように、書かれた「お寺」が真宗寺院であるよう、なしうる限りの統制を加えたが、自分の集落に真宗寺院がなく、他宗寺院がある場合、その寺のことを書いているかもしれないから、100%真宗寺院に絞れたかどうかは分からない。

39名の中学生の家が門徒として所属する手次寺は、多い順に長光寺12、正願寺11、大川通敬寺5、慶願寺3、粟倉本覚寺3、不詳1と、町内の真宗5カ寺で中学生のほぼ9割を占め、残り4名の手次寺は近い隣接町に散在する。門徒は町野河谷に点在する集落から山道を越えて徒歩で往復するのであるから、手次寺はおおむね遠からぬ集落に存在する。

町内関係寺院の門徒総数は、多い順に長光寺約300、正願寺約270、慶願寺約150、通敬寺約60、本覚寺約30と大差がある。門徒戸数200内外以上の大坊には子寺と呼ばれる従属寺院が附属する。子寺は地元社会では寺院の数に入らない。大坊と50～60戸以下の零細寺院とはさまざまな点で異なるが、39点の作文でその差異を嗅ぎ出すことは難しいだろう。以下、作文の文意が推測できるかぎりなるべく補正を避けたが、読み易いよう仮名書きを漢字に置き換えたところがある。記者識別のため居住集落名および性別と個人番号を括弧でくるんで付した。

2.1 全般的な印象

寺（寺院）といっても多義的である。a 本堂・庫裏等建築物および立木のある境内という、外から見える物的設備の総体、b 物的設備に拠って活動する僧侶とその家族（寺族）、c bに門徒集団を加えた宗教運動体で、行事のとき発現する。以上のように外観から識別して、便宜的にaを寺、bを僧、cを行事と呼んでおく。

a 寺の印象

寺はひっそりしてさみしい、気味がわるい、ととらえられている。それは、「うすぐらいところに仏さまがかざられている」（徳成・女1）、「葬式をしたりするから」（鈴屋・女1）だという。しかし、静かなたたずまいに拒否感をもっていない。「人里離れた・・・大きな木のしげったしずかな所に」在る寺は「金銀でかざってあってほんとうにきれい」（川西・女1）、また寺の中は大きく「ほりものがしてあって金色に美しくひかっている」（鈴屋、男）、「あの広い本堂には大きな大きな柱」（曾々木、女1）とむしろ称赞の声を揚げるのである。

寺の鐘も印象深い。「村の人に時間をしらせる」（川西・男3）というのは寺の鐘のことに違いない。学校から東へ一里ほど山道を歩いて帰る少年は、「ぼくの部落へ近づこうとした、静かな山道にさしかかろうとしたとき、そのお寺（長光寺）のかねがゴンゴンとひびくに・・・その時はもううすぐらく、静かな森にひびきわたるそのかねが心をおちつけてくれる。・・・この時が一日のうち一番すっきりした時であり、こうふくをあたえてくれます」（寺山・男2）とまで言う。

b 僧・寺族の印象

「あそびにいくとお寺の人はしんせつになんでも教えて下さいます」（金蔵・女2）、また学校の休日に寺へ子守にゆく少女は、「赤ちゃんがねむると奥様に宿題や勉強を習います・・・寺へ行くと楽しい」（大川・女1）と書き、坊守（寺の主婦）とのきわめて親和的な関係を伝える。さらに「お寺の奥さんはたいへん子供がすき」「あんなに子供のすきなおくさんにいそがしい田植えや稲かりのじきに子もりをしてもらったらよいという話が、婦人会長さんやPTAの人々の耳に入り、役場の人に話をし、小さな幼稚園のようなことにした。みな子供たちをお寺にかよわせてしんぱいなく仕事が出来るようになって・・・口々によかったといっている」（東・男1）と、坊守が所在集落の切実なニーズによく対応している例を報告している。

僧侶については、「人が死ねばおそうしきにいく坊さんはたいへんお金がもうかる」（川西・男1）という素朴な観察と同じことを、「ご坊さんはおけ（経）をよんでお金をもうける」と書いた少年が、この文章のすぐ前に「寺はたいへん世の中によいのであります」（寺山・男1）と寺を積極的に肯定していることから推測できるように、僧が法礼を受けることに批判的ではない。また、「人が死ぬと行ってお経よんで、それでごちそうを食べてよいきげんになって家にかえる。そのつぎの日にはお金をもって寺へやってくる。そすると坊さんはよいきげんで」（鈴屋・男1）というのも、これに連なるものであろう。

しかし、法礼とは直接関係のない集財には批判の眼が光ることがある。「この間そこの寺（屋根瓦を葺く費用を集めた寺）の女の子がお嫁にいくのだといって、お金を五百円あつめにきた。

僕は腹が立った。そういうことはぜんぜんぼくの家にかんけいがないけれど、ほかの人たちはちゃんとはらっていた。それは年よりが多いためだと思った。そういう自分の家のことまで取りにくるのである。こういう悪口をいっておこられるかもしれないが、そういう自分のことは自分の方でして、信用あるお寺にしてもらいたい」(川西・男2)という尤もと思われる批判が提出されている。しかし、寺の屋根葺費用は門徒団の支弁するべきものであり、寺族の結婚費用は門徒総代などの協議により、門徒団が応分の協力をするのは、真宗寺院の旧慣である。これを当然とする意識は世代的に伝承されるが、若年層では崩れるかもしれない。上記はそれが表出された稀な事例である。

c 行事の印象

さきにお寺はさみしそう、さみしいところ、と言った少女たちも、寺は「にぎやかな時もある、たとえばお盆」「家中そろってお墓まいりにいく時はとてもにぎやかである」(大川・女2)、「なにかお参りでもあったりすると、寺の中いっぱいになっている。そういうときはほんとうににぎやかです。……お参りもすんでしだいに人が帰ってしまいます。そうするとまたもとのさみしい寺になってしまいます」(徳成・女1)と描写している。行事のとき門徒が集合して賑やかになり、行事が終わって門徒が帰宅してしまえば淋しいところとなる。平常のさびしい姿の裏に、行事の時のにぎやかな姿が隠れていることに注目している。

寺の行事として作文に現れたのは、毎月二十八日のお講である。この日、門徒は米をもって集まり、本堂に膳を並べて会食したあと読経・説教とつづく(鈴屋・男1、井面・女1、大川・女2)。年一回のおとりこし(報恩講)も言及されるが(寺山・女1)、この真宗門徒最大の行事にふれた者は唯一人で、記述も短い。現地調査によれば、桐堂会は報恩講に並ぶ大きな行事であるが、名称の言及すらない。盆まいりは名称だけ出てきたが、年頭まいりには一言の言及もない。

関連して寺への負担をみよう。どの寺でも門徒の財力に応じて賦課する月仏供米の制度がある。現地調査によれば、正願寺では特等(3戸)の米2斗以上から六等(98戸)の米5升まで七等に分けられていた。しかし、作文には月仏供米は全く登場しない。

参詣の都度「みやかし」(灯明料)を持参するほか、年に一度米を持って行く。門徒を地域別に編成した講中が交替に毎月二十八日のお講の当番を勤めて、講員は御堂にならんで会食する。そのための米であるから(鈴屋・男1、金蔵・男1)、寄進ではないこともちろんである。

なかには所在集落の各家から秋じまいになると米でも豆でももらって歩く寺がある。しかし、これは慣行的義務的な募財ではなく、坊守が農繁期に保育所を開いて農家の手助けをするからである。人々は快く米や豆を出している、という(東・男1)。

講中が一年交替で御堂番を勤め、饗銭集めや本堂雪垣の設置と撤去などを担当するが、これらのうち雪垣設置が「寺のまわりのかき」作り(大川・女2)とか「お寺の冬の支度」(栗蔵・男1)という名目でふれられている。また、お講と寺族用の薪作りもおおむね講中の任務で、講中ごとに春伐っておいた薪を秋には山からかついで寺参りをする。地元でホイカツギとよばれるこの作業のことは、「寺の木だし」(大川・女2)の名で言及されている。しかし、こうした寺への負担に関連した情報に作文記者たちは遠くもあり、また関心もないようである。

全般的な印象を述べた作文記者たちは、二、三の例外を除き、いずれも寺との一体感に近い親しい感じを表明している。口能登の真宗寺院と比較すべき要点の一つであろう。

2.2 世代別、寺とのかかわり

寺・僧・行事のうち、門徒とのかかわりが全面に出やすいのは行事である。門徒全戸がかかわるが、家成員の行事へのかかわりかたには顕著な世代差が認められる。

まず作文記者およびその年齢層の子どもにとって、寺の行事の日は詣って仲間で遊ぶ好機であった。「お寺になにかあると、とんでいきます。寺へいくと子供はいっぱい来て遊んでいるのをみると、私もなにか楽しくなって、一しょにあそびます」(金蔵・女2)というのが何点もある(寺山・男5、寺山・男6)。「ほくもしばらく(たくさんのお参りの)中にいたが、たいくつになったので外へ出て遊んでいた」(徳成・男2)。「お七夜の夜としよりの人たちがお参りする。また子供たちも夜あそびに行つて碁なりしょうぎやめんこをしてあそぶ。……(説教を)聞いてはいるけれど、ほくらにとってはさっぱりわからない。だから少ししてからまたあき間へ入つてかまた碁などする」(徳成・男1)。夜だから外へ出るわけにいかず、坐っている人たちの空き間にもぐりこんで遊ぶのである。「私は遊んでおつたら、お母さんやおばあさんはいっしょうけんめいに参つております。お寺まいりが終わりました。お母さんが私達に行こうかと言いました。私達は家へ行きたくはありません。……自分でお寺参りにきたのじゃないと思います。遊びにきたのだらうとお母さんに言いつけられました」(東大野・女1)。彼らは寺の行事があるとき、祖母や母といっしょにお参りしても、実は遊びにきたのである。境内は広くて立木や建造物があり、本堂の外郭も子どもたちの集合的な遊び場として好適である。だから、彼らは寺の行事のさい遊ぶために寺へ行くのである。

家族といっしょに寺参りをした一少年は、遊び仲間をみつけれなかったのであろう。「ほくは寺のすみっこに長いこと坐っていた」(寺山・男4)と回想している。この地方の慣習では、それでも、全部すんで家族が帰途につくまで、待っていなければならない。かくて、「寺は待たなくてはならないものである」(徳成・男1)という総括に導かれる。

お寺のことを語る祖母の長話から、「寺と私の生活は深いつながりをもっている」ことを悟った少女(色度・女1)がいる一方で、「私達のような若い者と寺とはあまり関係がなさそうだ」(曾々木・女3)と言い切る少女もいた。私は、遊ぶために寺へ行く少年とは違って、自らを若者と同定している少年期から青年期への過渡期にある人たちを対象にしていることを自認しなければならない。寺とはあまり関係がなさそうな理由として「若い人は仕事に忙しいからなかなか行けないでしょうが、行きたくない気持ちもあるでしょう」(川西・女3)という観察が注目される。仕事に忙しい青壮年、とくに男子は、青年のための催しでもないかぎり、行事のさいに寺参りをすることはないだろう。また、都合がついて寺参りができるときでも、若い参詣者が外にいないことを想定して、行きたくない気持ちになるだろう。既婚の女性は別として、青壮年の人たちが寺参りをしない理由、そして寺とあまり関係がない理由は明らかである。寺参りをせずとも、寺はきれい、寺参りはきれい、と作文に書かれた青壮年、そして親世代の人は一人もいなかった。

最後に年寄りも、「私達が映画を見て楽しむように、寺へ行つて参るのがたのしいにきまっている」(川西・女1)とみる少女がおり、また「寺はおじゝおばゝ等のじんのび場所と感じた」と言い、「なぜなれば、家に居る時なんか、昼のひぎなか、まさか皆の働いているのに居眠りも出さず、曲がった腰をたゝきながら仕事をしなければならぬ」(曾々木・女3)と寺が老人の「じんのび場所」である理由を説明する少女がいる。方言の「じんのび」とは「心伸び」、心を伸び

つも清らかな心をもってお参りすること、それが私はお参りする時一番大切なことだと信じております」(川西・女2)。少女たちが日頃感じている批判から、あるべき寺参りの姿が描きだされている。それは将来の変化を生み出す胚芽となるかもしれない。

2.4 寺の存在意義

では、寺はどんな存在意義をもつものと考えられているのだろうか。「寺がなかったら、多くの年寄りが楽しい時がなくなるに違いない」(川西・女1)、「お寺がなければお参りする(ことができない)・・・寺はたいへん世の中によいものであります」(寺山・男1)と、参詣して楽しむ時間を老人に持たせる点で寺はたいへん有用だとする。こうした今世の有用性とは別に、「人々が死んだ後人間の一生を結んでくれるのはお寺だと思います。・・・私達がこの世を去ってから大変世話になる所」(粟蔵・女1)と後世の有用性が指摘されている。今世後世をとおして寺はなくてはならない。なかに、わが国の現在の経済状態からみて、町に一戸(一カ寺)ぐらいでたくさん、現在は寺が多すぎるという意見(寺地・女1)もあるが、寺不要論ではない。寺の存在意義が揺るぎなく認められ、集落生活の大切な宗教センターとして、地域の生活に親和的に溶け込んでいる奥能登の真宗寺院の様相が窺われるのである。

3 口能登・鹿島町中学生の作文に描かれた真宗寺院の態様

口能登では邑知潟地溝帯の東縁に位置する越路町を選び、芹川を拠点として面接調査を1953年8月4～9日、ついで同年11月25～28日に実施した。作文は第一回調査時に越路中学校の協力をえて作成してもらった。記者は3年生1、2組計87名(男46、女41)。うち移住者あるいは記述不備で宗派不明計4名以外は真宗に属する家の子たちであるが、なお3名は所在部落の日蓮宗名刹日澄寺について書いているのでこれも除いて、残り80名(男42、女38)の作文を資料とする。町内9集落に散在し、手次寺としては、町内8カ寺に39名(49%)、残り41名は町外10カ寺に分散している。地域的分散度は町野町に比べて格段に高い。

越路町のなかでは、芹川・二宮・徳前の3集落は接近して住民計約500世帯の一大群落をなし、町の中心地域であって町役場も小・中学校もここに所在する。この3集落に所在する真宗寺院、芹川専福寺、二宮長賢寺、徳前仏乗寺(以上大谷派)、二宮受念寺(本願寺派)の4カ寺すべてに面接調査を実施した。いずれも門徒数100戸内外の小規模寺院で、町野町でみたような大坊はないし、従属寺院はもとより、零細寺院もない。対象中学生80名中3集落居住者は40名(50%)、4カ寺の門徒は20名(25%)。同じ集落所在の寺とは門徒でなくとも性年齢別集団等を通して密接に繋がっているはずである。したがって、この4カ寺を調査して共通点に注目すれば、約半数の作文の、寺を中心とする生活背景を探りうると判断した。以下、中学生80名の作文をこのような準備立てのもとに分析する。

3.1 全般的な印象

a 寺の印象

寺の外見的な印象は、奥能登と同じように、気味がわるい、さみしい、といった記述が目立った。事例を挙げよう。

①「本堂に僕だけです。少し気味がありません。いやに体がぞくぞくして来る。天井がいやに高くみえる。前をみればよけいに気味がよくない。横、上、前、後、どこを見ても気味がわるい。骨の入れた箱もあり、仏の像も掛軸もたくさんある。……恐ろしい」(二宮・男4)。

②「お寺ときくと、まるでさみしいような、又夜になるとお墓からなにか出そうな気がする」(二宮・女9)。

また、「お寺はなんだか気持ちがわるくてしかたがない」と書いた少女は、本堂が大きいことに驚き(芹川・女4)、外にも建物の大きさに驚いた少女(二宮・女6)、柱が普通の家の柱の五倍ぐらいもあるとその大きさに驚く少女(坪川・女1)があり、彼女たちはなぜこんなに大きいものを作ったのだろう、と訝っている。その底に、馴染めないものに出会った、①②に通じる違和感が潜んでいる。したがって、奥能登の、平素のさびしい姿の裏に行事のときのにぎわいを見ているのとは、異なる。

「寺参りは好き」というのはごく稀で(久乃木・女2)、「寺参りは好きでない、きらい」というのが多いことは(二宮・男1、二宮・女9)、予想のとおりである。

他方、寺になつかしさを、親しさを感じる子たちがいる。彼らは父母を亡くした子どもであって、寺の本堂に亡き父母の魂が鎮まると思うがゆえに、寺になつかしさをを感じる。「あの寺の中にはなつかしい父の“たましい”が納められていると思うと、寺の前を通ると思わず頭がさがってくる」(徳前・男8)、「寺の御堂などへいくと父のおもかげをうかべることもときおりあります」(武部・女5)、「お寺へ行ってお参りしました。今お父さんの顔や姿はみえないが、“たましい”だけでも会えると思うと、ほんとうにうれしかった」(坪川・女3)、「お寺には、お父さんも母さんも私を見まもっていると思えば、また胸がすっきりしてしまいます。卒業後は毎年お寺へお参りして、お父さんやお母さんを喜ばしたいと思っています」(原山・女1)という。今は父母健在で、寺は大きらい、などと思った子どもたちも、加齢にしたがって親の死亡を経験し、かつ父母の魂が寺に鎮まると思うとき、寺になつかしさを、親しさを感じるようになるのかもしれない。

b 僧侶の印象

「気品のある人」(二宮・男4)というのが例外的にあり、「やさしい」という印象を記した筆者なら何人かおり(原山・女2、徳前・女1、二宮・男3)、門徒をよくしてくれるのかとおもうとありがたく思ってます」(久乃木・女)、「私たちとかお母さんおばあさん達に説教を聞かせて上げてらっしゃる、ほんとうに何というありがたいことかと私は思います」(二宮・女7)と「ありがたい」という者もいるが、多くは「気持ちがわるい」と書いている。例えば、

③「御坊さんはかみそりで毎日かっている。なんだか……気持が悪い。そして衣服も長々と感じが悪く、家の建方も昔くさく言葉も……これで良いのかと私としては言いたい」(二宮・男2)。

④「母は御坊さんがきらいだとおっしゃる」(武部・女1)。これらの事例が示すところはきわめ

て表面的直感的な印象で、理由もおそらく漠然たるもの、というほかない。しかし、嫌い、という者の多くは確たる理由を添えていた。さらに事例を掲げる。

⑤「野菜をどの家でもお寺へもっていく。……お寺の人は米も作らないで、門徒の人にもらったもので……一年中の米はたくさんだと思う。……それに、一年に四回ぐらいお金をあつめる。百姓のひどい生活の中から、あせの金である。……私はだから……お寺など大きらい。お寺の人をもっと親切で、大いに説教してそのお金で米なり野菜を買って食べてこそ、仏さまにありがたく思われ、人からもよく思われると思う。それでこそ私もお寺が好きになる」(徳前・女6、父は寺思いの篤信者)。

⑥「七尾の寺へお参りに行った私の父は、坊主は欲のふかいものであるといわれた。神仏は何も救つてはくれない。とくに坊さんはすくうどころか、我々から物品をもらっているではないか。それが人をすくってくれるか。……私たち若いものに対しては用のないものであるといわれるほど、若い人は寺をさらうもとは、迷信ぶかいからである」(坪川・男3)。

僧侶(寺)を嫌う理由として、寺(僧)の金穀物財集め(募財)にみる「欲深さ」と、⑥はこれに加えて迷信深さを挙げている。ただし、ここにいう「迷信深さ」は広い意味に理解しなければならぬだろう。例えば、「仏さまはあるとは思われない」(芹川・男2)の、僧はこれがあるものと決めてかかっている。少年少女にとって疑わしい宗教事象を単純に肯定することは、すでに迷信深いのである。

金穀物集めに示される欲深さのため、僧は卑しい、という印象をもつ者まで現れる。

⑦「なんでもお寺にことがあるとお金を集めにまわるのは、たいへんお寺としてはいやしいことだと思ったことがあります。」(久乃木・女2)。

⑧「私は寺はあまり好きではありません。寺はいやしいこじきみみたいな気がします。家へくればそう、寺へ行けばそのじょうたいが表れる」(坪川・男1)。

以上のように、生徒たちの寺、僧侶にたいする印象は一般によくはない。それは、彼らの日常的な経験によるもの、とくに両親の態度が彼らの好悪の態度を方向づけるといってよいのではないだろうか。親のなかには寺にたいして忠実な人もいるが、概して一步身を引いている。寺や僧にたいして距離をとる、さらには批判的な親の本音が、子どもたちの態度を方向づけるのであろう。ただし、⑤のように、篤信の父の娘にして「お寺など大きらい」、という例もあるように、子にたいする親の感化は一義的でなく、そこに世代的な変化がある。世代的変化の要因は、子ども自身の僧侶経験であろう。その一例として、庫裏の一角に公民館を設置するなど、先駆的な活動をしている僧侶への批判を挙げておく。批判されているのは、彼が自らの主張に忠実であるためかもしれない。

⑨「寺に長男が今六年生で長女が一年生です。私と妹とその寺へ遊びにいきます。そうすると、その御えんじゅ(院主)さんが今日はいそがしいから家へ帰ってくださいというので、私も腹がたって何のために公民館があるのかわからない、そんなのならこんな公民館にこないと心の中において寺を出てきます。ここの御えんじゅさんを皆の人たちがよんで、"どうもならん"といっているのを私はかげに聞いていて、なあるほど、そういえばそうかな、と思った。このあいだも友達とお寺(付設の公民館)へ勉強をしにいったときも、十時頃家へ帰ろうと思って一生懸命勉強していたら、寺の御えんじゅさんがさっさと家へ帰らんとお父さんやお母さんがまっておいでるから、早く帰りなさいととおっしゃったので、私と友達とぶつぶついってお寺を出ました」(二

宮・女5)。

3.2 僧侶(寺)による募財

奥能登では寺への親和的な感情が作文に漲っていたが、ここでは作文の多くが僧侶(寺)に親しみを示していない。それは一に募財のためである。奥能登でも募財はあるがとくに問題になることはないのに、ここでは募財が寺への親しみを失わせている。中学生の作文という視野の限られた資料であるが、募財の実態を調べてみることにしよう。

寺有財産の乏しい真宗寺院は、門徒からの財施に大きく依存している。どの寺でもそれぞれ募財の取り決めがあり、葬祭関連の読経・説教・司式・納骨などの法施がこれに対応する。寺檀関係は門徒からの財施と寺僧からの法施の交換関係といってもよい。したがって、財施が大きく、法施が小さい時には、この交換関係が揺らぎ、寺檀関係が安定性を失う。作文によるかぎり、鹿島郡の真宗門徒は一般的にこの状態にあるようである。

人々は葬祭のために僧を招き、寺を設立して門徒となった。ほとんどの真宗寺院では、弱小の門徒が多数集合してその経費を負担する(いわゆる集合氏寺)。真宗僧侶は妻帯し、寺院はその子孫が相続するものであるから、住職家の生活保障も門徒の不可避の役割となる。かくて、門徒から僧侶への財施とは、財的に寺院を維持し、かつ住職家の維持を助けることである。

財施の値は金額あるいは物量として客観的な数量で示されうるが、時代の社会意識や状況に規定された個人の主観もここに関わってくる。例えば、昭和20年代の農村では、供出制によって自家保有の米の限度が厳しく制約されたため、農家でも自家産米を昵懇の家にさえ分与する余裕はないことがあった。その場合、寺に献ずることに消極的とならざるをえず、寺から度重なる献米の要請があれば、門徒はこれを僧の欲深さ、食欲さを示すものとみることとなった。寺の献米要請が慣行により妥当と認められるいくつかの場合でも、保有米が少ないとき、度々の要請は門徒の批判、反撥を誘発する。財施をめぐる寺檀関係には、財施を求める僧の態度および財施評価にかかわる時代状況が深くかかわっているのである。

もっとも、販売されない自家用の農産物については、財施は一定に保たれる傾向がある。例えば、つぎの例をみよ。

⑩「(手次ぎの)受念寺は人さえくれば喜ぶわけである。なぜ喜ぶのでしょうか。その時は家にとれている野菜や穀物などをきまって持参しなければ、お寺に申しわけないとか、お寺の仏がおこっているなど、まるで迷信のようなことを言って、野菜をどの家でももっていく」(徳前・女1)。作文記者たちが捉えた募財の実態はすでに事例⑤でふれたが、なお関連記事を追加し、併せて僧の募財態度に憤慨する声を聞こう。

⑪「まるで集団で押し入って物取りして行く感がないでもない」(徳前・男4)。

⑫「坊さんはよく人助けだと言うが、じつを言えば人いじめである。農民をだましては物をとって生活をしている。人だすけだと言うならば、物を集めていかないはずだ。自分で仕事をして生活をしたらよい。門徒に入らないほうがよいとおもう。人が死んだら、どこの寺の坊さんでも頼んできたらよい」(武部・男3)。

この外「ほんとうにお寺はぼろいものだと思います」(徳前・女2)、「父は坊主は何と貰うことばかり考えているのであろうといった」(二宮・男1)、「寺というものは得ばかりして損は

しないと思う。物ももらってばかりおって、少しもくれません」(二宮・女5)、また「お母さんは、よく寺とゆう所は集めてさえいればいいといいます」(二宮・女3)などと、手きびしい。

寺は本堂の石垣修繕、屋根葺きなど御堂修繕、釣り鐘購入などのさい、そして一年中の経費のほか、住職の子どもの教育費、結婚費用などまで門徒から集金する。さらに「お講」など恒例行事があるごとに金穀物財を集める、と何点もの作文が指摘している。

加えて、野菜の収穫期には、門徒は最上の初物を自主的に寺へもってゆく。「それで寺ではそれほど感謝してもいないだろうと思う。なぜならば、多くの家々からたくさん物をいただいているから」(芹川・男2)と推測しながらも、ある生徒は、このような寺檀関係を「門徒といっただけで自分のようになっていく」(芹川・男2)と評している。そういえば、奥能登の寺檀関係は一種の親分子分関係かもしれない。

また、ある生徒は釣り鐘購入の募金のために来訪した寺僧が父に語った、「寺と言うものはあなたごとの宝であるからいくら寺へしこみをやっても損はない」との言葉とともに、父が積極的に募金に応じたことを記憶していた(武部・男2)。「しこみをやる」とは方言で「なかみをこめる」という意味である。

生徒たちの非難には、事情を知らないゆえの誤解に基づくものが多い。寺の建造物の修復・新設の費用、年間経費は門徒の負担であり、住職および寺族の生活費、教育費、結婚費用などの相当部分は門徒が負担することは、真宗寺院存立維持の必須条件として宗門一般の慣行である。門徒は自発的な懇志としてそれぞれに醸金するのではなく、門徒の代表である総代・世話方の会議で財力等を勘案して各人への賦課額を査定し、少なくとも募財を適法と承認するのである。

寺で定例的に聞かれる「お講」の行事は、若衆講・カ、講・ト、講など門徒の性年齢別集団や、門徒の地区別当番が担うもので、読経・説教の後、必ず「オトキ」(共同飲食)がある。そのために米・野菜・調味料などを集め、余り物および食材の残りは寺に置いてゆくが、寺族のために集めたものではない。部落の寺でのト、講・カ、講に言及する者(徳前・女4)、カ、講・若衆講に言及する者(芹川・男1)や若衆講に言及する者(西・女2)があり、「お講をやめればお寺は困るだろうが、お講を続ければ門徒の人達が困るとまではいかななくても、大変迷惑する。それを平均すれば、やはりお講は少なくした方が善いと僕は思う」(徳前・男4)という意見がある。お講をやめれば寺は財施を受ける機会が減るとみているようであるが、お講がそれほど財施と結びついているかどうか、疑問である。ただ、度々のお講は門徒にとって迷惑であることは指摘のとおりであろう。

また、月仏供米という名で寺の年間経費を集めることがあるが、これは寺の維持費である。秋ヅ、ミ(徳前・女5、西・女1、米収穫後の秋勧進)という米集めもあるが、集めた米は寺の行事と寺族の生活に当てられる。いずれも僧が勝手に行うことではなく、総代・世話方が恒例の行事として認める集財である。生徒たちはこのような集財に関する慣行を知らないで、非難の声を挙げている。

彼らの背後に、この慣行に疎い親、あるいはこの慣行を無視する親があるのであろう。しかし、たとえ親がこの慣行を遵守しているとしても、生徒たちが寺檀関係を担う家の代表者世代ではなく、関係の周縁に位置する未成人であるから、寺檀関係の実際に無知であっても問題にされない。だから、生半可な知識によって非難するのである。

上記の、慣行的な寺檀関係に関する情報は、主として町長・役場書記、公民館長、寺院住職・

坊守、中小学校長・教諭、教育委員・長、部落の有力者といった地域の有識者たちから聞きとったものである。したがって、寺院の行事にしても、寺檀関係にしても、旧慣が語られて、現代の変化は附言されるにすぎない。これにたいし、中学生は従来からの慣行に疎いために、意図せずに旧慣の改廃を先取りしたような内容の作文を書いた。彼らの意見が地域の有識者が語る従来の慣行と食い違うのは当然のことである。彼らが寺檀関係の慣行に疎いのは、実社会の周縁であるためだけではない。寺にたいして「子分」のようだった時代が確実に終末を迎えている時代の動きのゆえでもあろう。当代の財施の形態は、彼らによって作り変えられていくのではあるまいか。

3.3 僧侶（寺）からのサービス提供

門徒からの財施にたいし、寺僧からのお返し的な財施が全くないことは、上記の引用に明らかであるが、門徒の負担を少なくする努力は寺僧によってなされている。七尾の光徳寺のように多数の門徒があれば、門徒各人の負担は少なくすむが（西・男1）、越路町の4カ寺のように、100戸内外の少檀では門徒各々の負担は小さくなく、それでいて門徒の財施だけでは住職家は緊縮家政を余儀なくされる。そこで、門徒の財施に全面的に依存しないですむように、寺僧側では別途収入の道を講じ、僧職の品位を傷つけない職員勤務に就いている。仏乗寺では候補衆徒（次代住職予定者）が布教師、その妻が教員、受念寺では候補衆徒が教員、長賢寺では坊守（住職妻）が保育園保母、泉福寺では住職が教員を務めている。門徒の緊急の要請にも応えることができるよう、住職はなるべく勤務せず、寺に留まるようやりくりしていることも察せられよう。それは寺役のためであるが、また住職の内職は、その権威を蝕む傾向があるので、これを避けようとしているのではないだろうか。

a 寺の施設の開放

周辺に樹木が林立する広い境内は、子どもの遊び場としてふさわしい。作文には、石けり、まりつき、縄跳び（在江・女2）、かくれんぼ、鬼ごっこ（二宮・女9）、さらに自転車の稽古（二宮・女3）など、作文記者たちが境内で平素から遊んだ遊びの種目が挙げられている。祖父母などと一緒に寺へ参っても、本堂にいて説教を聞かず、境内に出て遊ぶのが、男女を問わず幼少の作文記者たちの常であった。その点では奥能登の子どもと変わらない。

青年会が講演会の余興の練習を寺の本堂を借りて行うこともある（徳前・男7）。小学校上級生のとき、日曜日には境内の掃除をしたという少女もいるが（芹川・女2）、地域住民による寺の境内や本堂の適時使用は、地域の旧慣の一部であろう。それに即しつつ、寺の施設を積極的に地域住民に開放する試みが始まっていた。

二宮長賢寺の住職は満州で6年の布教経験をもつ僧である。寺は門徒から取るばかりでなく、与える仕事、社会事業をやらねばならぬ、という主張から、庫裏の一部を開放して公民館（二宮・女2）を開設し、青年学級を設けている。さらに境内の木を伐採してスペースを拡げ、図書館と保育園を建てる計画という。同じく二宮の受念寺の住職は長賢寺の活動に刺激を受け、二宮保育園の表札を掲げて動き始めた。この保育園に長賢寺の坊守が勤めているのは、自坊に保育園を開く準備とのこと。（二宮の真宗2カ寺の関係は、所属する派を異にすることを全く感じさせない

相互啓発的なものであることに注目。) 徳前仏乗寺も保育園を開いている。保育園は農家の歓迎するところで、とくに農繁期に喜ばれるので、受念寺の保育園開設後たちまち広がり、常設でなくとも、季節保育所ならどこも開設するようになった

「保育所に朝弁当を持たせて出してやると、夕方家の人が帰る時に帰るから安心です。それだけ大勢の所で生活するのですから、自然活発な子供になると思うとうれしい」と、子どもの発達にたいする効果に言及する作文もある(二宮・女4)。

このように調査対象の真宗寺院は、どこも社会サービスを目指して活動を開始していた。僧たちはただ座して門徒から物をせびるばかりの旧来の在り方を脱しようとしていたのである。しかるに作文の多くが旧態の寺僧像を攻撃的としているのは、まだ変化は僅かで、人目を惹くに足りないためだろうか。

b 法施、その評価

以上、僧侶の世俗のサービスについて述べたので、僧侶本来のサービス、宗教的サービスについて述べる。法施の問題である。

門徒からの財施には、先に述べたように、客観的な評価基準があるが、法施(僧侶の葬祭サービス)の値は主観的に判定される。法施でもサービスの回数や時間の長さ・参加人数などにより、あるいは僧が身につける法衣や読誦する経典・文類によって客観的に査定しうる部分があるが、多くはサービスを受ける側の主観によって決せられる。財施は「もの」が中心であるのにたいして、法施は「こと」が中心であるからであろう。僧侶のサービスを死者の鎮魂慰霊、生者の安心・生き方に関連して有難く思う門徒には価値が高く、閉じサービスでも有難いとは思わない門徒には価値が低い。それに、権威ある僧の法施の値は高く、権威の乏しい僧の法施の価値は低い。

⑬「私の家に御坊様がお経を上げにいらした。……御坊様は声をふりしほって参っていらっしゃいます。……そのお経は私のお父さんが戦死し、お祖母さんが死んだことを慰めにいらしているのか、生きる人が死なないように頼んでいるのか、また死んだ人に対して生きて帰って来る様に願っているのかは知れない」(久乃木・女1)。何のための読経なのか、いずれにせよ、彼女は僧侶の読経に相応の価値を認めている。

評価の個人差は大きいですが、一般に、家業の解体、交通の発達、生活文化の向上は世代の推移とともに法施の評価を低下させ、寺僧のサービスを尊ばない風潮が広がる。越路町はまさにその変化の渦中にあり、祖父母世代よりも親世代で、法施の評価が低いようである。こうして、財施の価値はさほど変わらないのに法施の評価が下がると、財施の額も下がって寺檀関係は低いポイントで均衡を回復する。邑知潟地溝帯でも、七尾線の西のほうが東より寺詣りが少なく、布施も少ないと言われるのは、この一事例かもしれない。このような口能登と対比するとき、奥能登では法施の評価は高く、それを支える寺僧の権威はまだ揺るぎないと言ってよいだろう。

法施の筆頭に位置付けられる儀式は葬儀であろう。印象深い葬儀を経験した中学生はいるに違いないが、これにふれた作文には一件もなかった。中学生では表現できない哀惜の思いに圧倒されるからだろうか。年忌などの法事については、「ご開山蓮如様とかいった人の掛図をお寺から借りてきてぶつだんの前へかける」という情景を綴った一例(徳前・女4)を除き、作文記者たちは寺の集財との関連で法事に触れるばかりで、法施としては捉えていない。

生者の安心・生き方にかかわる説教は、法施としてとらえやすいサービスであるが、「坊さん

という物はほんとにありがたいと思うときがあります。何故かというと、私達とかお母さんおばあさん達に説教を聞かせて上げてらっしゃる」(徳前・女7)という総括的観念的な作文一件を除いて、説教を評価するものはなかった。親や祖父母に連れられて寺へ行ったとしても、本堂に坐って説教を聴聞するよりは、外へ出て境内で遊ぶことが多かった彼らには、嫁姑の話とか哀れな兄弟の物語、人間の一生(武部・女5)や生まれかわり(坪川・女2)など、興味をそそる話の断片を説教の例として綴る者が僅かあるにすぎない。

説教が法施として受けとめられることが少ない以上、説教から受けた感化にふれる者がいないことはいまでもないが、家族を中心とする仏教的雰囲気の中で受けた感化に言及する者なら、少数あった。

⑭「お寺の前へくると頭が自然にさがるように思います。それは家の人達からお寺の前へ行って頭をさげなければいけないと私の幼い頃からよく言い聞かされているので、それは今だに忘れられません」(二宮・女6)。

⑮「私達の小さかったころ、なにかいたずらすると、仏さまがみているから、いたずらをしてはだめ、といわれています」(坪川・男5)。

⑯「朝夕仏様におまいりして心を改め、困難な時は神にお願いする。お願いしても願いはかなわないけれども、自然におがみたくなる」(西・女1)。

これらの証言を生み出す家庭の背後に僧があるはずであるが、僧の影はかすんで見えにくい。寺に好感情をもつ子どもの少ない集団であることがその重要な条件と思われる。

法施を受けるはずの寺参り行動の担い手は、作文記者たちの祖父母である。彼らは祖父母の寺参りをどうとらえているのだろうか。

⑰「私の祖母はたいへん説教をきくのがすきらしい。お寺の坊さんというと、神や仏のような気持ちでもするのかもしれない」(二宮・男1)。この少年はお寺参りがあまり好きでなく、父は説教が大きらいという。

⑱「年よりは年がゆき働けなくなり、一人ぼっちになって家にいてもさみしいので、近所の年より達とおまいりに行ってくるといいながら、お寺へまいる」(坪川・男5)。

⑲「私は小学校五、六年の時、隣のおばさんにつれられてお寺にお参りしたことがある。……中に入った時、腰のまがったおばあさんがなんまんだぶつ、なんまんだぶつと念仏をとえながら歩いているのをみた。……私の隣のおばあさんはお坊さんの説教を聞きながらこっくりこっくりとねむっています。いや隣のおばあさんだけでなく、みなの人がねむってなんまんだぶつ、なんまんだぶつと言っているのです。すると、これはお説教を聞きにきているのではなく、ねむりに来ているのである。うすぐらいお寺の中にはろうそくの光で仏さまの中だけを照らしています。そしてお線香の煙がゆらりゆらりとほっていきます」(徳前・男9)。

説教をきくのが好きという老人もなかにはいるが、寺参りは自宅にいたので寂しいためというべき老人もあり、居眠りするためとしか思われない老人なら沢山いる。「頭をふって」(坪川・女1)理解できたことを示す年寄りもいるが、「おばあさんは目をとじてじっと"木"のようにすわったまま動かなかったので、おばあさんに寺へねむりにきたのうと言ったら、おばあさんは目をあけて、ねむっていても耳があるからわかるよ、と僕の耳もとへよせて言ったので、ぼくは、うわ、といっているうちに昼になった」(徳前・男3)。また、「おばあさんたちが参ってもいねむりしているのでは、何を言っているのか きこえない。ただパス賃使ってくるのに、ぼくはう

ちにはぶつだんというものがあるのではないか。そこへまいったほうが、来たよりもよいと思った」(武部・男4)という、観察も綴られている。さらに、おばあさんたちは死んだら極楽へ行きたいとでも思って寺参りをするのかもしれないが(徳前・男10)、善い行いをしておけば極楽へ行きたいとお参りする必要がないという少女がいる(二宮・女4)。

これらの描写から窺われることは、老人たちは参詣によって法施を受けておらず、娯楽的機能の享受に止まっているということである。ほとんどの作文記者たち自身も、寺僧の読経・説教を法施として受けとめていない。それは若すぎるため(坪川・男1)、寺の行事を大切にする人もいる親世代の年まで、さらに寺参りに熱心な祖父母世代まで年を積んで、少年少女では参入できない未知の社会的経験を重ねるなら、彼らも法施をそれ相応に評価できるようになるのかもしれない(久乃木・女2)。このような現状では、彼らが認識する財施は大きく、法施はいうに足りない。寺の募財を厳しく批判し、寺そのものに好意的になれない根本的理由が判然としよう。

3.4 地獄極楽の説話

作文記者たちが寺を嫌う第二の理由は、寺にかかわって迷信深いという印象をもつことであった。迷信的説話の代表ともいえるべき、すでに上で、ふれた地獄極楽の説話については、「お坊さんが悪い事をすればじごくへ行くとか、またよい事をすれば極楽へ行けるなどといわれるのを、年寄りが本当にしているように私は思います」と一記者(徳前・女1)が見たように、年寄りこそこの説話の受け皿であろう。そのことは、つぎの証言に明らかである。

⑩「よくおばあさんやおじいさんの話を聞くと、いまお参りしておかないと、死んでからどこに行くのだといわれます」(久乃木・女2)。

⑪「極楽へ行くにはどうすればよいのですかときけば、お父さんやお母さんがやはりお寺へ参ったり、毎日仏さまにおまいりするよりほかはないんだよ、と云っておられた」(武部・男1、祖父母なく、信心深い父母に育てられた)。

⑫「(新しいことをやった者だけが極楽へ行かれると言う寺僧に釣り鐘購入費の寄付を約束した)お父さんは、おれ達も極楽へ行かんならんから寄付をしておいた方がよいだろうと言っておられた」(武部・男2、祖父母なし)。

では、作文記者たちはこの説話をどうとらえているのか。寺で説教を聞いて、「死ねばやはりじごくか極楽へ行くのかなと思った」(前掲武部・男1)、「死んでいきますと、じごくあるいは極楽があると今まで思っていました」(坪川・女4)、また寺参りが嫌いな一少女は、「あまり参らないと死んでから地獄へいくのだろうかと思ったりすることがちょいちょいある」(二宮・女9)と記しているのは、彼ら自身がこの説話を信じている、少なくとも気にしていることの証言であろう。しかしこの3例の外は、

⑬「御坊さんは沢山の年寄りを集めて極楽行きのような説教をしている。・・・私はそんな死人が生きて来たような話は嫌いだ。この科学が勝利をもたらしている社会に極楽や地獄が必ずないとだんげんする。極楽じごくは生きている時にあるのだ」(二宮・男2)という意見に代表される。彼らは地獄極楽の説話を真とは認めず、深刻な疑念をもってこれと対峙している。

この少年の批判はさらに続いて、説教の効果がなくことに及ぶ。

⑭「それ(極楽行きの説教)を聞いて、年寄りはありがたく思って我家へ帰って行く。そして御

坊さんに説教された事を実行せず、若い御嫁さんをいじめている。このような現象を見ると、年寄りが悪いのではなく、教える御坊さんが悪いのではないのかと、私には思われる。……私は何十年後に年寄りになる。その時は御坊さんの言う事は絶対聞かない。又仏へも頭を下げない。そして若い御嫁さんを心から愛し、家を経営し、毎日々々を最善に送り、そして極楽でもじごくでも、行く方向へゆきたい」(前掲二宮・男2)。また、

㉕「(年寄り)は) ご坊さんの説教をきいて、ご坊さんの言っていることはわかるのかわからないのか知らないけれど、いつでも南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏といたりして、まるで真宗を信じているようで、……老人でありながらまた真宗を信じていながら、いじのわるい事をしている」(坪川・男7)と批判する、同意見の少年がいる。

これらは僧侶批判というより説教を聞く老人批判である。説教で教えられた極楽参りにふさわしい行為をせず、正反対のいじわる、人をいじめていることを非難するものであるが、人いじめをやめさせるような説教ができない僧侶批判でもあろう。募財や迷信の問題ではない、僧侶批判の第三のタイプである。

説教を契機として噴出した寺僧にたいする徹底的批判は、やや穏やかな言葉でほかにも述べられている。2例を提示しよう。

㉖「私は寺のご坊がいうのを、そのまま聞いてはいけないと思う。ただその内容をつかんで一部分の自分の好む所をとって、明るい家庭生活を送っていったらよいと思う。健全なよい生活には、寺などという墓のそばにいるご坊は世の中に多すぎる。農村の発達しない原因にも、少し影響するのではないのでしょうか」(坪川・男1)。㉗「大きくなったら、ちっとも宗教はいらないように思いますが、これでも年寄りになったら、さみしくなり、寺へ寺へとかけつけて、やっぱり寺はなんと良い所かと思ひ出す時が来るかもわかりませんが、今は寺なんかいるとはなんにも思いません」(坪川・男5)。

寺参りを担う祖父母の孫たちの世代で、上記のように、説教批判から寺参りの意義どころか寺自体の存在意義さへ問われている。

以上のように、地獄極楽、因果応報(芹川・女4)といった通仏教的な解りやすい説教にふれた作文はあるが、私の参与観察(1953.11.27)で語られた、末代の在家衆生を等しく救わん、分けても極重悪人を救わんと阿弥陀如来の大悲について説くような、真宗教義に関わる説教は作文には登場しない。

「お経がすんでお金を集める。お寺の人はすこし休んでこられてからお経がある。それが終わってからお金を少しおいて帰るとゆうように、お寺へ行くことはお金を少しもって行くものとされている」(二宮・女3)と報ずる作文がある。私が参与観察でえた情報では、読経の後と説教第二席の後に6尺ほどの柄のついた籠(妻錢籠)を廻して集金する。説教師の接待費と旅費のためである。最後の説教のあと、心ある参詣人は膝元に金子を置いて立ち去る。これは膝元銭とよばれ、説教師の草鮭銭(旅費)の一部となる。寺がこれらの喜捨を所得として収納するのではなく、こうした直近の用途のために集金するのであるが、中学生はそこまで理解していないようである。もし寺の欲深さの一例と考えているのなら、事情を知る立場にないための誤解である。

㉘を含めてかなりの数の作文記者たちは、若者も加齢にしたがい寺参りをするようになるのでは、とみている。「若い人のお参りしているのは少ないのはなぜだろうと思ってみたら、若い人はまだまだ年をとればお寺にお参りするのかと思います」(久乃木・女2)。「年寄りはお寺にお

参りがあると、家に仕事があってもそれを退けてそこへいく。……やはり一生にはこういう運命があると考えなければならないであろう」(久乃木・男2)。「ほんとうに年が行くと念仏をとなえるようになって思うと、年を取るのはいやになるほどである」(芹川・女1)と、口々に言うほど、年をとれば寺詣りをし、念仏を唱えるようになる者がふえると予想している。それは彼らの経験知である。この経験知を支えるのは、加齢に伴う家族的地位役割の変化に応じた行動パターンの採用であり、とりわけ加齢の間に経験する近親の死亡であろう。幼少時に父が死亡した少年(徳前・男8)は、父の魂が寺に納められているという観念が定着して始めて、仏を有難く思い寺の前では頭が下がるようになった。「やはり年がいくにしたがって仏心がおきてくるものでしょう」と証言している。奥能登の少年たちの寺への親和的な態度と思えば、口能登の少年たちでも老年になれば「仏心」が生じてくるものかどうか、疑問なしとしないが、何らかの変化が必然であろうという思いをうち消すわけにいかない。

3.5 寺、僧侶に対する否定的態度の社会的基盤

作文に示された寺、僧侶にたいする中学生の態度は、総じて私の予想を遥かに超える厳しいものであった。想像を加えた、文字通りの作文も混じているためではないか、と疑うこともできないわけでないが、実際に作文を読んでも、そんな余裕など中学生にはない。親たちから聞いたこと、また(あるいは)自分たちが経験したことをもとに、本気になって綴ったのが批判の文章となったと言わねばならない。未成年ゆえに寺＝僧侶という成人の活動領域の周縁にしかいない彼らは、無知あるいは一知半解から誤解に陥った部分、総体をみず、一面だけをみて全稱的判断をくだしたところがあるにしても、一片の事実をつかみとっているとは言えるのではないだろうか。一片の事実とは、寺＝僧侶の批判されるべき側面である。まさにそれこそ一面をみての批判ではないか、との異論はありうるにしても。

中学生たちの親は壮年、祖父母は老年で、彼らの作文から三世代の変化も浮かび上がってくる。両親を失った者は1人、片親を失った者は数人おり、祖父母のない者は半数に上ったが、祖父母がいなくても老人の寺参りは直接観察している。この条件下で寺＝僧侶との関係についての三世代の差違を推論することは許されるであろう。

祖父母世代は労務から引退した立場であるから、社会的満足のために話相手を求め、閑暇を利用して寺の年中行事に参加するが、親世代とくに父は農耕や雑業に忙しく、母が家を代表して大きな行事に寺参りする程度である。中学生はこども身分の終盤を楽しむように、寺参りの祖母や母とともに寺へ遊びに集まる、という寺＝僧侶との関係の世代差が見えてくる。これはすでに奥能登で寺との関わり方の世代差として観察したところであった。祖父母世代はおおむね慣行的な信仰行動を示し、親世代は寺に忠実敬虔な者もいるが、寺＝僧侶の募財を受けとめる立場から批判的な者が少なくない。中学生に至つてはさまざまであるなか、徹底的な寺＝僧侶批判さえ出現する。親世代で奥能登との差異が現れ、孫世代でこの差異が顕著なものとなる世代差の地域差は、1953年11月町野町で中学生の作文を入手して明確となる。

1953年8月、私は一旦東京に帰って作文を読み、寺＝僧侶にたいする中学生の否定的な態度に感を深くする。同年11月再調査を志して越路町に赴き、25日芹川の旅館に宿をとった。夕刻、襖を隔てただけの隣室から談話の音が聞こえる。否応なしに耳に入ってくる話に興味をもった私

は、その要点を調査ノートに記録した。それを転記しよう。

25日中井旅館ニテ宿泊ス。町役場新築現場へ電灯ヲ引クタメニ電気工事人3人宿泊シ、九時頃マデ雑談シテイタガ、ソノ中ニ寺僧ニ関スノレ話アリ。現世デ、安楽ニ生活シテイテ、ソノ上、来世ノ安楽ヲ希求スルノハ、欲ガ深スギヨウ。大体、アノ世へ行ッテ帰ッテキタ人ハ未ダナイノダカラ、ソナコトヲ願ッテモ同ジコトナシ。トコロガ、コウシタ人ノ欲ニツケコンデ、布施ヲトルノガゴ坊サマデ、アル。布施ヲトッテ私腹ヲコヤスノモヨイ。アル人カラトッテ、少シデモナイ人ニ施シテコソ、衆生ノ濟度ガデキルワケダガ、何デモカンデモ取ル一点パリダ。

終戦後間モナクノコトダガ、疎開シテイル在所ノゴ坊サマガ、寺へ布施ヲシテホシイトイッテキタノデ、百円ヲ志シテ出シタ。トコロガ米デナクテハイラヌトイフ。当時百円トイフ金ハ大金デモアッタガ、家族六人ヲカ、ヘテ米不足ノタメヤミ米ヲ買フノニ苦心シテイタ最中デアッタカラ、布施ニ出スベキ米ハナイニキマッテイル。一俵ノ供出位デモ米作りヲシテイル者ナラ米ヲ出セヨウガ、米ナド私ニハ出シヨウガナイ。ソレデ腹ヲ立テ、金デハ困ルノナラトッテ貰ワヌ、トイッタ。スルト、金デモヨイトキタ。ソコデ、ソレナラ始メカラ金ヲトレバヨイデハナイカ。オ前タチノヨウニ、人ヲ濟度スルコトモ知ラナイデ、トリタテル一方ノヤツニハ、タトヘコノ百円札ヲ鼻紙ニシテ捨テ、モヤラス。今後一切キテケレルナ。クソ坊主カヘレ、ト罵ッタ。モウ死ンダ父ガ、オ前ハ何ト失礼ナ、勿体ナイコトヲイフカ、ト青筋ヲタテ、オコッテキタ。私ハ事情ヲ話シテ、大体、コノヨウナクソ坊主ガクルト、横座ヲ譲リ、二ツノ皿ヲネプラスゴトキハ笑止千万デハナイカ、トイッタ。ソレカラ坊主ハコナイ。又、コチラモ坊主ハ一層キライニナッタ。

相客の話は省略するが、いずれも金銭がらみの僧侶の強欲さを実例で摘発していた。どんな話がきっかけで僧侶の欲深さが話題に上ることになったのか、厳しい批判が語られていると知って、耳を傾けたのだから、分からない。

町役場新築のための電気工事となれば、優先的に越路町の業者を指定するはずだから、宿泊する町外の業者は町内の業者の推薦で加えられたのであろう。そして、談話が9時頃終わったのは、3人のうち町内の業者が自宅へ帰ったためと推測される。私はこのように考えて、談話に登場した寺僧たちの舞台は、越路町界隈と見当をつけ、これを作文記者たちの社会的背景とみた。作文が描き出す寺僧の姿と電気工事業者たちが非難した姿がほぼ一致することは、当然のことながら、私のこの思いを強めた。作文に描かれた中学生たちの厳しい批判は、種々の誤解を含むにしても、寺院と距離をとっている地域住民の輿論を代弁するもの、と言って過言ではないだろう。

4 奥能登と口能登の真宗寺院の相違

「お寺」という共通題目で中学生が書いた作文によって、二 奥能登（町野町）と三 口能登（越路町）の真宗寺院の相違を窺ってみよう。作文には地域により情報量の差、現状報告か現状批判かという重点の相違があったため、2節、3節、同じ節だでの考察ができなかったが、全体として同じ事項群について検討しているので、比較可能と考えている。

奥能登における大坊の存在とその宗教的權威の持続にたいして、口能登ではそうした大坊は存在せず、小坊が並立して変化にさらされているという差異は、両地域の相違の根底にある条件と

して指摘しておかなければならない。

大観すれば、奥能登は旧慣持続、口能登はその変化として対比される。しかし、ともに変動の相はあり、それはそれぞれの地域での世代差として発現する。さらに、前節でふれたように、この世代差には地域差がある。

奥能登は口能登に一世代ほど遅れて変化しているのではないだろうか。基礎に能登の文化を共有しながら、外界との関わり（交通運輸通信の発達など）と内側から変化を促す諸力（第一次産業比の低下など）により、口能登がまず変化し、奥能登がこれに追随するという形で、地域変化の程度差が生じた。真宗寺院もこれに伴って変化の度を異にする。それが奥能登と口能登とのほぼ一世代の差として要約されるのである。ほぼ一世代の差と要約される内側の種々相について、具体的な解明が必要であるが、作文ではそこまでの詳細な追及はできない。考察を打ち止めにすべき時が熟したようである。

5 作文の調査資料としての価値

以上みたような個人の感情と態度は、日誌に痕跡を留めることだろう。また、少数事例にたいする反復調査ならこれに迫りうるかもしれないが、多数事例に接近する面接調査では不可能とみてよいだろう。しかし作文調査では、今回のように教師と生徒の信頼関係のもとで作成された場合、これが可能となることがある。作文が表出記録とよばれるゆえんであろう。

作文は主体の感情と態度を把握するために好適な資料であるが、そこから社会的事実接近できるかどうかは、作文記者の現在の地位役割と既往の経歴に依存する。今回取り上げた中学生の場合、活動的成人としてのみ正式に参加しうる社会現象についての事実を、正しく記録することは極めて困難であって、多くはさまざまな誤解にまみれた記録となる。作文の内容を事実描写と物語（とくに感情表明および錯誤を含む部分）とに分けうるとすれば、資料として作文を使用するのに先立ち、他の資料とつきあわせて、事実描写と物語を分別しなければならないであろう。

作文は事実究明の資料としては以上のような欠陥をもつ一方、主体の対象にたいする好悪・愛憎・尊敬軽蔑などの感情、知らないことの想像、また見ぬことへの予想、一言で言えば物語化、への接近という、他の技法ではきわめて困難な側面の解明に資しうる強みがある。作文には他の資料にない独特の欠陥とともに独特の強みがあることを、今回の試みが明るみに出したということができよう。

作文作成の1953年から64年の歳月が経ち、当時中学 2～3年生だった記者たちは存命すれば80歳近くに達している。紛れもない年寄りになり、やはり寺はよいところと思って寺参りにいそしんでいるか、それとも寺はいらなうと言ってのけた中学生時代とあまり変わらない意見に留まっているか、知りたいところである。この目的のために越路町、そして比較のために町野町を再訪して、関係者を探す努力をするなら、幾分かはその企図を達成ことができるだろう。今回の考察で資料とした作文の場合、ここにおいて初めて、その表出的価値が達成され、研究資料としての価値が発揚されるのではないだろうか。(2017年9月19日)

【参考文献】

江尻寅次郎編 1926『町野村志』町野史談会

II - 1 石川県能登・中学生の作文に描かれた真宗寺院 森岡 清美

森岡清美 1954「家族調査における個人的記録の使用—特に「日記」の資料的価値について」『家庭裁判月報』6
巻5号、19-51頁

九学会連合能登調査委員会編 1955『能登—自然・文化・社会』平凡社

森岡清美 1955「宗教生活」九学会連合能登調査委員会編『能登—自然・文化・社会』209-244頁

鹿島町史編纂委員会編・発行 1966『石川県鹿島郡鹿島町史』

森岡清美 1991『決死の世代と遺書』新地書房

森岡清美 1995『若き特攻隊員と太平洋戦争—その手記と群像』吉川弘文館

(東京教育大学・成城大学名誉教授)